

# 玉縄城五百年の 歴史とともに



**玉縄自治町内会連合会  
玉縄城築城 500 年祭実行委員会  
会長 田中 八郎さん (植木在住)**

トレードマークの『福耳』があればこそ。およそ、生活の苦しさなどとは無縁と思いがちだが、早くに父を亡くし、母親を助けながらの、苦労人である。

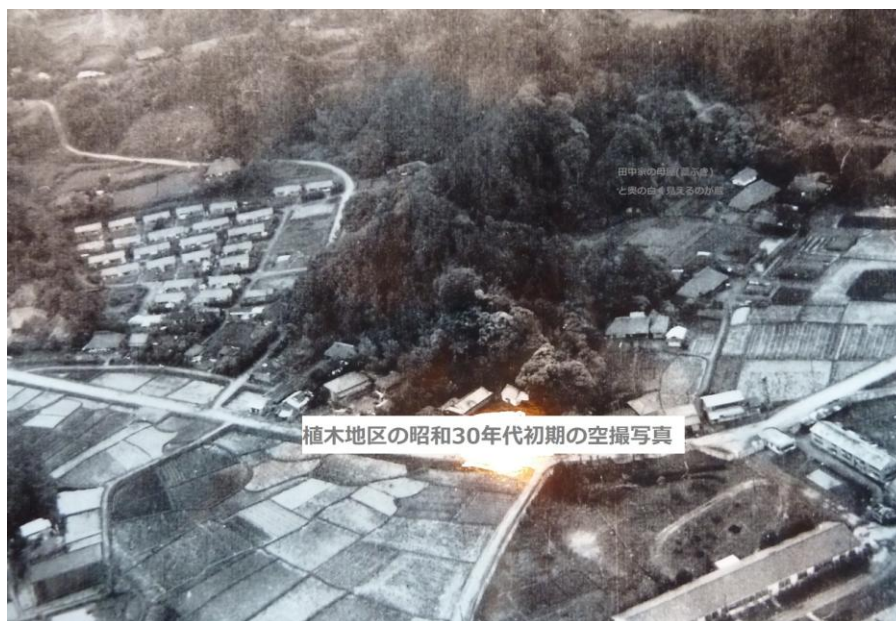
「バブルが終わったころ、辛い思いをした人たちを沢山見たね。わたしも先物や、土地取引に手を出したけど、何とかにここまで来れたのは、この“みみ”のおかげだったかもしれないな」と笑う。

玉縄城とともに代々500年、田中家が植木で存在感を示していた古文書がある。残念ながら多くを散逸して、手元に資料は少ないが、昭和48年に現住居を新築する前は、築200年もの藁ぶきの家屋に住んでいた。

隣接していた蔵には、火縄銃や刀剣等の武具類、銅製の鏡や江戸期に女性たちが使用した化粧道具、それに多くの古文書が所蔵されていた。また、この蔵は、水戸・徳川家にゆかりある、鎌倉・扇ガ谷の尼寺「英勝寺」の蔵をそのまま移築した、由緒あるものだったと言う。

植木地区で長く庄屋を続けてきた記録があり、祖父は大船町の助役、収

入役それに町会議員や、地元の村長も務めた。また、父親は教員で戦前、横浜駅西口近くにある小学校で教鞭をとっていた。



=右上の細長い藁ぶき屋根が田中家の母屋で、奥に白く見えるのが蔵=

## 母を助けての農作業

そんな田中少年は、大地主の坊ちゃまとしてなに不自由なく、育ったのかと言うとそうではない。「教員だった父親は42歳の時、病気で他界しちゃってね。私は小学校に入ったばかり。7歳の時ですよ。親類たちがいろいろ心配してくれたけど、生活の糧は母親の農作業からの収入だけ。学校から帰れば、嫌なんだけど母の手伝いばかりだった」。

遊びたい盛りの少年時代。親の目を盗んでは家に帰らず、農業試験所(現フラワーセンター)の空き地や、近くの畑で暗くなるまで遊んだ記憶は鮮明。しかし元庄屋の子息も、生活の切り盛りに必死の母親に、逆らうことは出来なかった。

戦後の農地改革による強制買収で、3町余りあった土地は家族が養える程度の規模にまで減らされた。中学(鎌倉学園)を卒業すると、残された7反余りの土地で、生計を立てていくことになる。「上の(高校)学校に行きたいと言えば、母は許してくれたかもしれないね。しかし、親類からは『お

前は身体も強くないし、自然を相手に農業で暮らした方がいい』と言われたりするもんだから、農業で生きることにしたんだ」。1年ほど農作業の見習い経験をする。16歳から本格的に関谷の原の畑と、植木の田圃で野菜づくりを始める。当時、円覚寺の近くにできた山ノ内の廉売所で即売したりして、収入を得ていた。

農業も甘くはなく、これからは養豚だと新しい事業にもチャレンジした。日本が高度成長期に入る前、昭和37年から38年にかけて、関谷原の農地で養豚場の経営を始める。友人3人との共同だったが、その後、植木の自宅裏でも70頭余りの豚を飼育した。残念なことに、仕事の上でも、良きパートナーだった先妻を、若くして亡くし、その後農業も畜産も手放すことになった。

昭和47年夏、37歳の時に転機が来る。23年間の農・畜産業から一転、サラリーマンへの転身だった。地元の農協に、知人の紹介で採用されることになったからだ。

「農協の職員と言っても、コネの無試験でね。やることは、車を運転して農家に肥料や農機具、もろもろの品物を届けること。結構きつい仕事だったね」。21年間は勤め人として、60歳の定年まで農協の職員として働いた。

## 26歳で植木町内会の副会長

「どういうわけか、人から頼まれると嫌と言えなくて」。若い頃から、忙しい仕事を抱えながら、地域のボランティアにはいつも積極的だった。

昭和35年、植木町内会の副会長に推され、就任する。26歳の若さだったが、以来現在に至るまで、町内会の要職から離れられない。

農協に在職中だった時期、植木の町内会長に推された。『現役で仕事をしながらの会長は、適当ではない』と、勤務先から指摘を受けたこともあって、この時は、会長でなく副会長で承知してもらったりした。とにかく、頼まれると断れない性分なのである。



=写真④平成23年11月、秋の収穫祭。味噌づくりで県農業会議会会長賞を受ける=

ごく最近まで、田中さんの公職は20を超えていた。年齢のこともあって、現在は辞退の願いをしているものの、それでも10を下らない役目をこなす。土・日曜も含めて、家を留守にすることの方が多く、多忙の日々は続く。手相を見てもらっても、その福耳のゆえか、『参謀役よりあんたは長が向いている』といわれ、いつもオサ役に推挙されてきた。

## 自慢のカラオケ 89 点

「小学生のころから意外とすばしっこくてね。遊び事でも要領よく、すぐ覚えたりしたよ。それに、どういうわけか音楽の先生が『田中、お前歌が上手いな。音楽の素質があるよ』なんて褒められたりもした」。そのゆえか、時間を見つけ、ストレスの解消はカラオケ。

「最近のカラオケは、歌の上手下手を採点してくれたりしてね。この間は、渥美二郎の『夢追い酒』やったら89点」。奥飛騨慕情やさざんかの宿、木曾路の女など演歌を中心にレパートリーは広い。それと、度を越さない程度のお酒。日本酒や焼酎をちびりとやりながら、演歌でも聴く。

また、「鎌倉凧の会」のメンバー。それぞれが自慢の凧を持ち寄って、年2回、材木座の海岸で凧あげをする。風に乗って舞う凧、そして糸を伝わる手ごたえ、感触。

役目が多くて時間もあまりとれないが、箱根や湯河原の温泉につかるのも格別の楽しみ。



名前が八郎だからと言って、8人兄弟のゆえではなく、5人兄弟の次男坊。末広がりの思いを込めて、父親が名付けた。

昭和9年12月生まれの77歳。

凧上げ時のスナップ。鎌倉凧の会会長と㊦本人